「岡山桃太郎空港　空港づくり基本構想」の概要

岡山桃太郎空港を取り巻く社会情勢は、グローバル化の進展や空港間の競争が激化するなど、大きく変化している。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、航空需要が見通しづらい状況ではあるが、岡山桃太郎空港が、様々な課題に対処し、県内企業の企業活動を支え、県民にとって利便性の高い空港であり続け、持続的に発展するよう、概ね20年後を見据えた将来像を描き、その実現に向けた戦略を取りまとめる。

１　岡山桃太郎空港の現状、課題及びポテンシャル

（１）岡山桃太郎空港の現状

- グローバル化の進展などから、開港当初と比べ利用者数は約５倍に成長
- コンセッション方式による空港運営の導入に伴う空港間の競争の激化や人口減少への対応が必要
- 新型コロナウイルス感染症の収束後を見据えた感染症対策と利便性向上が必要
- 開港から30年以上が経過し、適切な維持管理や設備・施設の更新が必要
- 国際線エリアの施設が狭隘化

（２）課題及びポテンシャル

主な課題	主なポテンシャル
• 施設の維持管理・更新への対応 • 新型コロナウイルス感染症への対応 • 施設の利便性向上と機能強化 • 競争力の確保 • 認知度の向上	• 豊かな観光資源 • 県内企業の海外進出 • 3,000メートルを有する滑走路 • 中四国の交通の要衝

２　岡山桃太郎空港の将来像

岡山桃太郎空港が、県内企業の企業活動を支え、県民にとって利便性の高い空港であり続け、また、中国・四国地方をはじめ、近隣エリアからも利用される空港として競争力を確保し、持続的に発展していくため、令和22（2040）年を見据えた将来像を、全体像と具体的な姿として、次のように定める。

（１）全体像

地域を支え、国内そして世界とつながる私たちの国際空港

（２）具体的な姿

①　地域経済の活性化やグローバル化を支える空港

- アジアを中心にグローバルに事業展開する県内企業を支える空港
- ものが集積し、国内外への販路拡大の拠点となる空港

② ひとが行き交い、交流の拠点となる空港

- 県民が国内外どこへでも気軽に訪問できる空港
- 国内外の観光客が利用し、賑わう空港

③ 優れた拠点性を活かし、バックアップ機能を担う空港

- 大規模災害等が発生した際、広域支援の拠点となる空港
- 耐震化や感染症対策などに取り組む、安全・安心な空港

３ 将来像の実現に向けた戦略

（１）エアポートセールス戦略

航空ネットワークの拡充により利用者の利便性向上を図り、より多くの方に利用される空港づくりを進めるため、既存路線の利用拡大、新規就航に向けたエアポートセールスに取り組む。また、航空貨物取扱量の増加に向けた取組を強化するなど、滑走路のポテンシャルの最大化に取り組む。

（主な内容）

- 県内企業のビジネス利用や県民の観光利用の促進のため、プロモーションを航空会社等と連携して実施
- 県内企業や県民のニーズを踏まえたチャーター便の誘致や定期便化に向け、プロモーションを実施
- 3,000メートル滑走路を活かし、ロングチャーター便や貨物積載量の多い大型機を誘致

（２）情報発信・魅力向上戦略

賑わいを創出し、航空機利用者はもとより、それ以外の方々が訪れたくなる魅力のある空港づくりを進めるため、情報発信と魅力向上に取り組む。

（主な内容）

- デジタルコンテンツなどを活用した情報発信を実施
- 土産品に加え、岡山らしい商品の品揃えの拡充など飲食及び物販店舗を充実

（３）空港機能強化戦略

県内企業の企業活動を支え、県民にとって利便性の高い空港であり続けるため、あらかじめターミナルビル等の拡張の可能性などを検討し、施設整備の方向性を定め、空港機能の強化を図る必要がある。また、施設の安全性の向上、感染症対策を進める必要がある。

（主な内容）

- 国際線施設を、同時に２便が出発や到着ができるよう増築・改修等の実施
- 安全・安心な空港の実現を目指し、新型コロナウイルス感染症への対応など、CIQ施設の機能強化の実施

- 岡山らしさを表す到着エリア内の内装改修や設備の老朽化の改善
- ICT、AIなど先端技術の活用
- 飲食及び物販店舗の再配置や送迎デッキの活用などによる賑わい空間の創出
- 遊休スペースを活用した国内線出発エリアの拡張等の実施
- ターミナルビルに近接した駐車場の増設など

（４）管理運営戦略

災害や感染症などイベントリスクに強い空港づくりに向け、利用者が安全に、安心して利用できる体制・施設づくりを進める。また、管理コストの縮減に取り組むとともに、管理運営手法ごとのメリット・デメリットを整理し、引き続き、これからの管理運営の在り方について検討を進める。

①　利用者が安全に、安心して利用できる体制・施設づくり

（主な内容）

- 備蓄品の確保等の環境整備や関係者との定期的な訓練など、事業継続計画（A2－BCP）の実効性を高める取組を実施
- 滑走路について十分な滑走路端安全区域（RESA）を確保するなど、国際基準に対応した改修等を実施

②　持続的な管理運営

岡山桃太郎空港が抱える課題を踏まえ、持続的な運営を行っていく上で、今後対応を検討すべき項目及びこれに係る管理運営手法ごとのメリット・デメリットを整理する。

（主な内容）

ア　エアポートセールスの強化

直営	コンセッション
県の他施策との整合を図りやすい。	民間事業者のネットワークや営業力を活かしたエアポートセールスが可能。

イ　空港の活性化に向けたコーディネート機能の強化

直営	コンセッション
企画・営業面で単年度予算の制約がある。	県の他施策との整合を図りづらい。

ウ　経営基盤の強化

直営	コンセッション
岡山空港ターミナル(株)がターミナルビルの収益改善に取り組んでいる。	空港基本施設とターミナルビルの一体管理によるコスト縮減が可能。

県の人員は、業務量に応じ配置。管理業務の専門的知見、ノウハウの維持が可能。	管理業務に従事する県職員を削減できるが、民間事業者のモニタリングや業務継続不能リスクへの対応が必要。

エ　施設整備に係る対策の実現や施設の維持・更新

直営	コンセッション
施設整備に係る対策の実現などに向け、県が関係者間の調整を行う。	施設整備に係る対策の実現に必要な資金調達を民間事業者が行うことが可能だが、岡山桃太郎空港の施設規模などを踏まえた検討が必要。

オ　イベントリスクへの対応

直営	コンセッション
大規模災害や新型コロナウイルス感染症のような不測の事態が生じた場合であっても、県の責任において継続して管理・運営する。	大規模災害や新型コロナウイルス感染症のような不測の事態が生じた場合において、民間事業者の事業継続が難しくなる可能性がある。

③　管理コストの縮減

岡山桃太郎空港における管理運営業務の課題及び他空港等における事例を踏まえ、管理コスト縮減策を検討・実施する。

（縮減策）

- 民間委託可能な業務の見直し
- 委託業務の発注形態のさらなる見直し
- 省エネルギー化、省力化に向けたICT技術の活用等

4　進め方

- エアポートセールス戦略、情報発信・魅力向上戦略及び空港機能強化戦略に掲げる具体的な方策については、今後、関係者で協議し、その実現に取り組む。
- 空港機能強化戦略の実行・着手については、令和３（2021）年度以降、この戦略をベースに、財政状況や利用者動向を踏まえ、必要性を認識しながら、予算措置など県議会や関係方面と協議の上、具体的な施設整備を目指す。
- 管理運営戦略のうち「持続的な管理運営」については、整理したメリット・デメリットや先行事例の状況、運営主体となる民間事業者の動向などを踏まえ、引き続き検討する。